在シドニー総領事通信

第19回　日豪の架け橋としてのカウラ

令和２年（2020年）７月10日

当地着任後、初めてカウラを訪問しました。カウラはNSW州内陸部にある人口約１万３千人の小都市です。シドニーからは西に310キロ（車で４時間）、キャンベラからは北に190キロ（車で２時間）ほど行ったところにあります。

第二次世界大戦中、この地に捕虜収容所が置かれ、1944年に日本人捕虜が集団脱走して日本人234名とオーストラリア兵４名が犠牲となりました。戦後、1964年に日本人戦争墓地が設置され、その後も日本庭園の開設や桜の植樹、様々な日豪草の根交流事業などが行われてきました。

カウラには、日豪間の戦争と和解、相互理解と交流の歴史が、地域の住民により目に見える形で大切に保存され、今も各種の交流が続いています。訪問を通じて、カウラが「日豪の架け橋」として大きな役割を果たしていることを実感しました。

今回の総領事通信では、カウラに残された日豪関係史の足跡をたどりながら、日豪間の協力と交流の将来について皆様と一緒に考えていきたいと思います。

脱走事件直後の日本人捕虜の埋葬

（1944 年８月、オーストラリア戦争記念館）

●カウラ脱走事件と日本人戦争墓地

私は６月 25 日のカウラ到着後、最初に日豪戦争墓地を訪問し、ビル・ウエスト・カウラ市長とともに献花を行いました。

カウラには 1941 年に捕虜収容所が開設され、最初はイタリア人を収容していました。日本人捕虜は 1943 年以降到着し、1944 年７月には 1,100 人強になりました。1944 年８月４日に豪軍から、下士官と兵を分離し、兵を別の収容所へ移動させるという通達が出されたことを受けて、その日の晩に日本人捕虜たちは集団脱走決行を投票で決定しました。

翌５日の未明、突撃ラッパを合図に約千人の日本人捕虜が脱走を開始しましたが、オーストラリア人監視兵が発砲し、日本人 234 名と、捕虜に襲われたオーストラリア兵４名が死亡しました。逃亡した捕虜は全員捕えられて収容所に連れ戻され、ヘイ収容所に移送された後、戦後の 1946 年４月に日本に帰還しました。死亡した日本人捕虜は、脱走事件の直後にカウラで埋葬されました。

当時の日本軍は、そもそも兵士が捕虜となることを想定していませんでした。1941年に陸軍大臣が示達した戦陣訓には、「生きて虜囚の辱（はずかしめ）を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿（なか）れ」とあります。兵士は捕虜となった時点で、生きていることを認められていなかったのです。そのため、捕虜たちの多くは偽名を使っていました。政府は戦死したものして扱い、捕虜たちは親族に連絡をとらなかったので、親族には戦死したものと思われていました。

捕虜たちは、そのような国の方針と行き場のない状況の下で、名誉ある死に場を求めて、脱走という自殺的行為に訴えたのでしょう。実際、この事件を受けての日本側宣伝放送の反応は、そもそも同収容所に日本人捕虜がいるはずはないとして、オーストラリア当局は日本の民間人収容者を殺害したと非難するものでした。

オーストラリア人戦争墓地への献花

（2020 年６月 25 日）

戦後、カウラ退役軍人会の会員たちは、オーストラリア人墓地の手入れをする際に、その隣りにある元敵の日本人墓地の手入れも同様にきれいに行っていました。日豪国交正常化後、1955 年にキャンベラの日本国大使館館員がカウラを訪問して、日本人墓地が良好に管理されていることを確認し、報告しました。報告を受けた当時の鈴木九萬（ただかつ）駐豪大使は、戦争中にオーストラリアで死亡した日本人全員の墓をカウラに移転することを本国政府に提案しました。

当時、戦争中に死亡した日本人の墓をどうするかが、日豪両政府間の一課題となっていました。遺骨を日本に送還する可能性も検討されましたが、1959年に遺骨送還ではなくオーストラリアに残すとの方向性となり、1962年にカウラに日本人戦争墓地を設置して各地から墓を改葬することが決定されました。

日本人戦争墓地への献花

（2020 年６月 25 日）

そして、1964 年に日本政府によりカウラに日本人戦争墓地が設置され、戦争中にオーストラリア国内の抑留所で死亡した日本人民間人も合わせ、522 基の墓が敷地内に収められました。墓地の入り口と慰霊空間は、当時メルボルン大学教員だった由良滋が設計しました。

上皇上皇后両陛下は、1973 年に皇太子同妃両殿下としてオーストラリアを御訪問になられた際、この墓地にお参りされ、桜を植樹されました。他の多くの皇族もこの墓地にお参りされ、各皇族による桜の植樹の銘板を今も墓地や日本庭園で見ることができます。

カウラ収容所跡地にあるカウラ脱走 75 周年記念碑
（2020 年６月 25 日）

私がシドニーに着任する直前の昨年８月５日には、カウラ脱走事件の 75 周年記念行事が開催されました。元戦争捕虜で唯一存命する 98 歳の村上輝夫氏が参列し、献花を行いました。収容所跡地には新たな記念碑が建てられ、前日には地元住民により折り鶴の灯篭も飾られました。

この 75 周年を契機に、カウラの戦争と和解の歴史を語り継ぐために、「カウラ・ボイス（Cowra Voices)」というスマホアプリが作られました。歴史研究の成果や地元の人たちの取組の証言を、文字でなく生の声で聴くことができます。同アプリは、日豪両国政府やカウラ市の支援を得て実現しました。私も現地で、埋葬された日本人戦争捕虜一人一人の話に耳を傾けました。

また、同じく75周年を契機に、「カウラ日本人墓地オンラインデータベース」も作られました。オーストラリア政府の公文書など各種の記録から、埋葬されている人々の氏名、出身地、職業および軍隊階級や所属、拘束理由、拘束時期、拘束場所の情報、拘束後の移動歴、死因や埋葬歴を確認してとりまとめ,オンラインで検索可能な形で公開するものです。犠牲者たちを遺族とつなぐとともに、彼らの様々な日本人の人生の姿を今に伝える大切な資料です。

カウラ空港に到着した成蹊高校の第１回交換留学生、
オリバー・カウラ市長夫妻と友人
(1970 年、Oliver Family Archives / Cowra Guardian)

●成蹊カウラ留学交流 50 周年

その後、日本とカウラの交流は更に発展します。カウラ退役軍人会会長も務めたアルバート・オリバー市長は、日豪の若い世代の人々が直接交流して相互理解を深めることこそ平和実現の鍵と考え、高校生の交換留学制度の創設に尽力しました。

1969年の訪日時には日本の候補校と話し、1970年にカウラ高校と東京の成蹊高校の交換留学が実現しました。これは、毎年高校生１名ずつを双方向に派遣し、１年間ホームステイしながら学ぶというものです。このカウラ・成蹊留学交流プログラムは運営委員会の尽力により継続し、本年50周年を迎えました。このカウラ高校で30 年以上日本語教師を務めたジュディ・スミス氏は、現在カウラ市の副市長になっています。

オリバー市長は、1977 年に東京農業大学 OB が編成する男声合唱団「コール・ファーマー(Chor-Farmer)」のオーストラリア・ニュージーランド巡回公演をカウラで受け入れるためにも努力しました。「コール・ファーマー」はその後も２年毎にカウラを訪問して、公演や日豪戦争墓地への献花をしながら日豪交流を深めています。

その他、戦後 50 周年の 1995 年には、カウラで日豪高校生約 300 名が参加するユースフォーラムが開かれ、翌年も同様のフォーラムが行われました。

カウラ日本庭園でウエスト市長（右）、グリフィス日本庭園理事長（左）と
（2020 年６月 26 日）

●カウラ日本庭園・文化センター

1970 年代には、日豪の和解と日本人捕虜の慰霊のために日本庭園を建設する構想も具体化しました。当時のドン・キブラー・カウラ観光協会代表、オリバー元市長、大河原良雄駐豪大使の努力、そして豪連邦・NSW 州政府、大阪万博記念基金、日本企業や在留邦人の支援を得て、1978 年に第一期工事が終了して日本庭園が開園しました。更に、カウラ日豪協会のトニー・ムーニー理事や実業家の戸倉勝禮氏の努力と東京都の支援も得て、1986 年には第二期工事が終了して完成式が開かれました。

今回、６月26日にこのカウラ日本庭園・文化センターを訪問し、ボブ・グリフィス同財団理事長の説明を受けました。庭園の設計者は、日本を代表する造園家の中島健氏で、オーストラリアの花崗岩やユーカリの木を生かして本格的な

回遊式庭園を作りました。中島氏は、庭全体を支える守護石と、神が天から降りる影向（ようごう）石が、この庭園の頂上にもともと存在していたのは天のなせる技であり、カウラで昇天した霊がこの影向石の上に降りるものと見ても差し支えないと述べています。そして、この庭園は自分の最高の作品であるとして、2000年の死後、遺言により遺族がこの影向石のふもとに遺骨を撒いたとのことです。

カウラ日本文化センターでグリフィス理事長と
（2020 年６月 26 日）

併設されている日本文化センターには、オーストラリアでの日本美術展や日本からの要人・団体来訪の際に寄贈された様々な作品や文物が展示されており、日豪文化交流の歴史を感じさせるものです。

今も、この庭園・文化センターは少しずつ発展しています。正門は、企業からの寄付により改修工事が行われ、2016 年に完成式が開かれました。文化センター

の屋根瓦は、豪政府の支援と日本政府の協力を得て、最近オーストラリア市場に進出した島根県の石州瓦に葺き替えられ、本年２月に竣工式が行われました。

このカウラ日本庭園・文化センターでは例年９月の花見の時期に桜祭りが開催され、昨年 30 周年を迎えました。例年、和太鼓、尺八、合気道などのパフォーマンスや、書道、生け花のデモンストレーション、着物や折り紙、茶道のワークショップなどが行われ、多数の観客が訪れます。本年の開催はコロナの影響で未定とのことですが、良い形で無事開催されるよう願っています。

日豪戦争墓地と戦争捕虜収容所跡地の間にある
永倉三郎公園（2020 年６月 25 日）

●桜の植樹と交流の広がり

その後も日豪交流事業は発展します。1988年，オーストラリア建国200周年記念事業の一環として、カウラ市は、日豪戦争墓地、戦争捕虜収容所跡地、日本

庭園・文化センターを結ぶ約５キロの通りに、1988本の桜の植樹を行う「桜通り（Sakura Avenue)」構想を発表しました。スポンサー制度で、それぞれの桜の木の銘板に、寄贈者とカウラの子供の名前が刻まれます。そして、前述の桜祭りが1990年に始まりました。橋本総理や安倍総理が訪豪時に寄贈した桜の植樹の銘板も、日本庭園前や収容所跡地にありました。

また、1980年代には永倉三郎九州電力会長が、ウランや石炭の商談の機会にカウラを訪れて日豪戦争墓地に感銘を受け，カウラに永倉三郎基金を設立して私財を寄贈しました。桜通りには1989年に永倉三郎公園が開園し、1990 年代のブルース・ミラー市長当時に今の姿に整備されました。基金は子息の永倉成二氏他により運営されて、カウラ日本庭園・文化センターや桜通りの維持管理に今も貢献しています。このようなつながりから、福岡県知事・県議会議長が率いるオーストラリア訪問団がカウラ脱走75周年記念式典に出席しました。

更に、カウラ日本庭園の運営に当たっていたドン・キブラー氏とトニー・ムーニー氏は、1988 年に新潟県の直江津捕虜収容所跡地を訪問して、同年中に豪人神父や同収容所にいた豪人元戦争捕虜を連れて再度訪問し、同収容所で亡くなった 60 名の豪人戦争捕虜の慰霊祭を行いました。これを機に、1995 年には捕虜収容所跡地に平和記念公園が造成され、豪人元戦争捕虜やその家族、遺族の出席を得て除幕式が行われました。収容所跡地のある上越市とカウラ市は、2003 年に平和友好交流意向書（Peace and Friendship Agreement）を取り交わし、上越市からカウラには中高校生が派遣されて平和学習を行っています。

今回の訪問の際、私はウエスト市長から、カウラには姉妹都市はない、日本全体と交流しているからである、との説明を受けました。

オーストラリアの平和の鐘でウエスト市長と

（2020 年６月 25 日）

●オーストラリアの平和の鐘

このようなカウラの平和への取組を背景に、日本のワールドピースベル協会は、国連本部の平和の鐘のレプリカのオーストラリアにおける設置場所としてカウラを選び、1992 年に平和の鐘がカウラ市役所横の市民広場に設置されました。当時の経緯は、スマホアプリの「カウラ・ボイス」でロッド・ブルーム市長が語っています。毎年９月 21 日の世界平和の日には、ここで式典を開催しています。

カウラ観光案内所で販売されているカウラ産赤ワイン「サクラ」
（2020 年６月 25 日）

●未来に向けて

今回カウラを訪問して、カウラ退役軍人会会員、歴代カウラ市長、カウラ日本庭園や学校関係者、一般の市民の皆様など、本当に多くの人たちが長きにわたり、カウラで日豪の和解のための交流を支えてきたことがわかりました。

その結果、カウラには日豪の友好を象徴するような様々なものにあふれています。例えば、カウラ名産のワインも、「サクラ」という名前のシラーズ種赤ワインが観光案内所で販売されていました。

このように日豪の和解と交流の歴史を体現するカウラのことを、多くの日本人、オーストラリア人に知ってもらいたいと思います。特に、オーストラリア在留邦人をはじめオーストラリアと関わりのある日本人や、日本と関わりのあるオーストラリア人は、是非実際にカウラを訪問し、体験いただければ幸いです。

シドニー日本人会の文化委員会は、例年９月の桜祭りと戦没者慰霊祭の機会に１泊２日のカウラ・バスツアーを開催しています。また、日本の中高生のオーストラリアへの修学旅行や短期研修・交流事業では、キャンベラとカウラを組み合わせて訪問すれば、本当に多くのことが学べると思います。

世界が新型コロナウイルスの困難に直面する中で、これから日豪両国は，政治・安全保障やビジネスをはじめ世界の平和と繁栄のために一層協力し、指導力を発揮していくことが求められています。そのためには、一人一人が日豪両国の和解と交流の歴史を知り、それを更に積み重ねていくことが大事だと思います。私も、先人から受け継いだカウラという「日豪の架け橋」を、日豪協力の深化に生かすよう努力する決意です。

カウラ・ボイス（観光案内スマホアプリ、75 周年記念事業）（英語）
https://cowravoices.wordpress.com/

カウラ日本人戦争墓地オンラインデータベース（75 周年記念事業）
https://www.cowrajapanesecemetery.org/jp/

日本の皇族のカウラ訪問（宮内庁）
https://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/koho/taio/taio-h23-1104.html

カウラ脱走事件 75 周年記念行事に参列した元捕虜の村上輝夫氏のインタビュー
https://www.facebook.com/125982670754724/posts/2705892249430407

スティーブ・ブラード著、田村恵子訳『鉄条網に掛かる毛布－カウラ捕虜収容所脱走事件とその後』豪日研究プロジェクト、オーストラリア戦争記念館発行、2006 年。
http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/WebI/Blankets/$file/Text.pdf?OpenElement

カウラと日本の対話（豪日研究プロジェクト）
http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/088031725e4569e4ca256f4f00126373/d2c108dc340667fbca256d280005d524

カウラ成蹊高校生交流プログラム記事(Cowra Guardian, 23 April 2020)(英語)
https://www.cowraguardian.com.au/story/6729725/enduring-friendships-formed-during-the-cowra-seikei-high-student-exchange/

男声合唱団「コール・ファーマー(Chor-Farmer)」
http://www.chor-farmer.com/

カウラ日本庭園・文化センター（英語）
https://www.cowragarden.com.au/

直江津捕虜収容所跡地・平和記念公園・展示館（上越市）
https://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/108698.pdf

カウラへようこそ（カウラ観光協会）
http://australia.or.jp/enquiries/cowra_visitorguide.pdf

カウラ観光案内（カウラ観光協会）（英語）
https://visitcowra.com.au/

中野不二男『カウラの突撃ラッパ』文春文庫、1991 年（文藝春秋、1984 年）。

全豪日本クラブ（JCA）『オーストラリアの日本人－一世紀をこえる日本人の足跡』記念史編集委員会、1998 年。

土屋康夫『カウラの風』KTC 中央出版、2004 年。

田村恵子「コラム６・カウラ捕虜収容所脱走事件」、鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争－記憶の国境線を問う』お茶の水書房、2012 年。

広島経済大学岡本ゼミナール編『学生が聞いた カウラ捕虜収容所日本兵脱走事件』ノンブル社, 2014 年。

Graham Apthorpe, A Town at War: Stories from Cowra in World War II, Railmac Publications, 2008.

（以上）